公益財団法人国土地理協会　第17回学術研究助成

河童による水辺環境保全運動の特徴と地域振興効果

研究代表者　　伊藤　達也　　法政大学

共同研究者　　小原　丈明　　法政大学

１．研究の概要と研究目的

（１）水辺環境保全運動と地域振興の関係

今回の申請研究テーマは日常の生活空間における水辺環境保全運動の特徴を、河童という存在を通じて明らかにしようというものである。全国に広がる水辺環境問題において、様々な生物を指標として保全運動を行っている団体、地域は数多く存在する。全体の水辺環境保全を見ると、魚類を代表とする水生生物保全の観点から行われる運動が多い。例えば、わが国で大きな社会問題となった長良川河口堰問題では、河口堰反対運動の象徴としてサツキマスが取り上げられ、実際の反対運動の中で長良川の象徴となっていった（伊藤 2006a、2011）。この他、アユの遡上阻害を問題とする活動は、筑後川、矢作川等全国各地に見られる。豊平川、多摩川等を中心に、鮭の復帰を目指して鮭の遡上してきた歴史を有する東日本の河川を中心に展開されてきたカムバックサーモン運動などもその一例と言えよう。また、水生生物を広く捉えれば、ホタルの保護を目指して活動するグループも全国的に展開している。さらには、ラムサール条約は水鳥と水辺環境の保全に関する条約であり、水鳥にとっての水辺環境のあり方、その上での人間社会との関わりが問題にされるが、そうしたラムサール条約の締結を目指す運動等もここで言う生物を媒介にした水辺環境保全運動の一環として考えることができよう。

一方、本研究テーマにおいてもう一つ大きな関心項目として掲げているのが、こうした水辺環境保全運動による地域振興の側面である。地域の過疎問題が深刻化している日本の地方において、地域独自の地域資源を利用した地域振興策は大変望ましいものである[1)]。従って、本来、保全を目指して設定される世界遺産やジオパークなども、地域の側からすれば格好の地域振興策になってしまい、その結果、環境保全と地域振興が対立してきた歴史がある。

一般に環境保全と地域振興は「開発と保全」の枠組みの中で、対立概念で捉えられることが多く、現実場面でもそのほとんどが対立を発生させてきている。しかし、それは非常に限定的でかつ固定的な捉え方であり、枠組みの作り方を工夫したり、修正を施せば、本来、環境保全と地域開発、さらには環境保全と地域振興は両立しうるはずである。そうした点では、新潟県村上市における鮭と地域社会の関係は環境保全と地域振興を両立させている典型事例と言えるかもしれない。新潟県村上市では、藩政期以来、三面川に遡上する鮭を持続的に最大限捕獲するために、河川を守り、鮭にとって遡上しやすく、産卵しやすく、生活しやすい河川づくりを継続的に行ってきた。これは単純に鮭を生態系の面から守りたいという目的から来るものではない。鮭の捕獲が村上という地域社会にとって大変重要な経済活動であったことが背景にある。現在では、鮭に関わる産業の経済規模は地域経済にとってそれほど大きなものではなくなっている。しかし、経済に支えられながら、村上市民と三面川の鮭の間には、他地域には見られない濃厚で複雑な関係が形成されており、鮭ならびに鮭関連産業は村上を語る上で欠かすことのできない地域資源、地域の社会文化的基盤となっている（須藤 1985、横川 2005）。

こうした中、存在の有無が争点になりながら、非常に多くの水辺環境保全運動の象徴的存在として現れているのが龍と河童である。どちらも、古くから地域の水辺空間を守る神的存在に位置づけられ、大きな水辺空間を守る龍、人々の生活空間レベル、小さな水辺空間を守る河童という役割分担を担ってきた。河童は全国でその存在が語られる一方、近年では、恐ろしさが薄れ、親しみやすく、身近な存在になってきている（写真１、写真２）。龍に比べて河童の方が人間にとって親しみがわき扱いやすいのか、河童をマスコットにした水辺環境保全運動は今や全国的に広がっている。

本研究は、こうした河童を象徴としている水辺環境保全運動を対象にして、その特徴を明らかにするとともに、その先の河童を使った地域振興の可能性を明らかにすることを目的としている。実在の生物種と存在そのものが争点となっている河童の間で水辺環境保全運動にどのような影響の違いがあるの

か、河童を象徴として活動する運動にはどのような活動タイプの相違があるのか、さらには河童を象徴として活動する運動の地域振興面での有効性は果してあるのか、を明らかにすることがより具体的な研究目的である。

写真１　埼玉県志木市のキャラクター・カッピー

出典）筆者撮影 2014 年 2 月 3 日

（２）従来の研究

筆者らはこれまで、水辺環境を破壊するダム問題や河川整備問題を対象にして、その問題点の指摘、対案の提示等を通じて、水辺環境の保全を目指す研究を行ってきた。長良川河口堰、徳山ダム、木曽川水系連絡導水路を代表とする木曽三川の水資源開発計画の諸事業は、過剰開発との批判を受けざるを得ず、また、完成した諸施設はその後、多くの環境破壊をもたらしてきたことを、筆者らは明らかにしてきた（伊藤 2005、2006a、2008、2017b、伊藤・在間・富樫・宮野 2003）。

この研究の流れは国内にとどまらず、韓国のセマングム干拓問題、4 大河川再生事業を通じて、韓国の極端な水辺改変事業に焦点化した研究へと続き（淺野・金・伊藤・平井 2009、淺野・金・伊藤・平井・香川 2011、伊藤 2006b、2017a）、中国では太湖の水質汚染と水道水源問題への研究関与を行ってきた[2)]（淺野・李・平井・金・伊藤 2011）。こうしたダム開発や河川整備事業の問題点を指摘する中で、水辺環境の保全を目指す研究は今もその有効性を失っていない。また、水質を一つの基準としながら、より水質の良好な環境を目指すタイプの研究もその実践的な意義は失っておらず、今後も継続的な進展が求められている。

写真２　宮城県色麻町のキャラクター・カッペイとマコ

出典）筆者撮影 2017 年 8 月 6 日

しかし、その一方で、これらの研究がなかなか水と人間社会のより適切な関係を構築していくための手段として全面的に評価されない、どこか理解のしやすさに欠けている部分、一般社会に対して通じない部分が存在するのではないかというのが、筆者らの偽りのない気持でもある。確かに自然環境として、またそれを代表する水質の良好な水環境は人々が望むものではある。あまりにも汚染の著しい水環境を憂い、その改善を人々が強く望んできたのも事実である。しかし、人間社会は河川や湖沼、海、その他の水辺環境に対して、ただ、水質面のきれいさだけを求め、その実現を求めてきたわけではない。そこには上述したように、人間社会と水辺環境をつなぐ水生生物のありようが、より大きな影響を与えているのではないかと考えるに至った。生物が存在してはじめて、人間はその環境をより良きものとして認識すると、現在、筆者らは考えている。

例えば、清流のイメージが付きまとうホタルは、当たり前ではあるが、餌である巻貝を必要とする。そして多くの巻貝が育つためには、水中の栄養物が多くなければならない。つまり、ホタルがたくさん

いる所はかならずしも水質が良い水域ではなく、むしろ富栄養化した水域、つまりはほどほどに汚れた場所なのである（遊磨・生田 2000）。それでも人間はホタルが飛び交う場所を環境の優れた場所として認識し、そこを流れる河川を清流と呼んできた。

恐らく人間はほどほどに汚れた場所であっても、ホタルが乱舞する風景をより好んできたのではないだろうか。逆にいくら水質のきれいな場所であっても、ホタルの飛ばないような場所はそもそも人間の視界に入ってこない場所であったのであろう。だとすれば、自然環境の良好さ、その代表としての水質のきれいさだけをひたすら追求することが、人間社会と水辺環境の関係を豊かにするわけでは必ずしもなく、その媒介として鮭やホタル等の生物をはさみ、その生物の存在を不可欠なものとした上で水辺環境を評価していると思われる。

今回、筆者らが「河童による水辺環境保全運動の特徴と地域振興効果」という題目で研究をスタートさせた大きな理由の 1 つがここにある。水辺環境保全運動において河童等水生生物の果たす役割は非常に大きいと筆者らは考えるのである。

（３）これからの水資源・環境研究

人間社会と水辺環境の間に生物をはさみ、その生物と人間社会の関係を明らかにする。その上で改めて人間社会と自然の関係を明らかにしていく。そうした研究はこれまでにも数多く存在してきたし、決して目新しい視点ではないであろう。筆者らもこれまで部分的にではあるが、ラムサール条約の登録湿地利用形態、観光意図等を明らかにする研究を行う中で、こうした研究目的意識を持ち、研究の進展を志してきた（淺野・金・伊藤・平井・香川 2013、淺野・金・伊藤・平井・香川・フンク 2015、淺野・金・平井・香川・伊藤 2013）。本研究はそうした水辺環境保全に関わる理屈立てをより具体的な住民意識レベルで明らかにすることを目的とする。

さらに本研究で意図しているのは、そうした水辺環境保全運動を地域振興策の中に位置づけて議論していくことである。上述したように、これまで開発を主とした地域振興策と、保全を中心においた水辺環境保全運動は、多くの場合、対立視点で捉えられてきた。既述した通り、筆者らはこうした捉え方、考え方に反対する。確かに開発を中心においた地域振興策は多くの場合、貴重な自然環境を破壊し、生物の生活域を失わせる役割を果たしてきたのも事実である。その結果、地球上から多くの生物種が消えており、その流れは今のところとどまる兆しがない。環境省自然環境局野生生物課（2014）によれば、地球上において種の絶滅速度は 1975 年以前、1 年間に 1 種以下だったものが、現在は 1 年間に 4 万種の生物が絶滅しているという。人間社会と自然の関わりがかつてないほど深刻化しており、現在、明らかに開発が環境を大規模に破壊していることは間違いない。

そしてそうした環境破壊が果してどれくらい地球の生態系を痛めつけ、その結果、人間社会そのものがどの程度傷つけられているのかについては、実はほとんどわかっていない。また、理解しようともしていない。そして、わからないから「地球は傷ついていない」「人間社会も傷つけられていない」として扱っているのが現在の人間社会の実態であろう。従って、地球生態系の破損が将来的に人間社会に致命的な負の影響を与える可能性はますます大きくなっている、というのが筆者らの考え方である。

将来に向けて、地球生態系の破壊を防ぐためにも、人間社会は生物種の保全や生物種との共存を視野に入れた地域振興策を生み出さなければならない。生物種がこれだけのスピードで絶滅している地球上で人類だけが生き残れると考えることは明らかに非科学的である。しかし、地球という 1 つのシステムをトータルに捉えるのではなく、分割し断片化して、部分の分析能力をひたすら高めることに勢力を傾けてきた現代諸科学は、その非科学性を全く疑うことなく受け入れてしまっている。その結果、部分はますます解明されていくものの、全体はますますわからなくなっていき、部分同士は矛盾に満ちた存在

と化していく。

筆者らはかつて国土交通省[3]によるダムによる水資源開発論理の説明を、この観点から激しく批判したことがある。国土交通省の説明はひたすら部分を断片的に説明するのみで、そのような説明をどれだけ足し合わせても全体の説明に到達することはなく、また部分同士の説明は矛盾に満ちていた[4]（伊藤1997）。このような明らかに誤った説明論理の下で、これまでわが国のダムによる水資源開発は行われてきたのである。科学的な装いを呈しているものの、その内容は極めて非科学的論理に満ちていた。

こうした誤りの束に巻き込まれないためにも、研究は適切な前提の下で行われなければならない。経済合理性に欠いた環境保護論では社会の支持を得ることはできず、地球生態系を劣化させるような開発論もまた排除されるべきである。既に地球をいくつも破壊できるほどのパワーを身に着けてしまった人類だからこそ、その力をよく理解して、その適切な使い方、本来のワイズユーズを身に着けていかなければならない。

私たちが目指す社会は持続可能社会（sustainable society）と呼ばれている[5]。現代世代が将来世代の利益や要求を充足する能力を損なわない範囲内で環境を利用し、要求を満たそうとする発展を持続可能な発展（sustainable development）と言い、それを各種指標で表した概念を持続可能性（sustainablity）と呼ぶ。持続可能社会は持続可能性に支えられた社会のことと言えよう。しかしながら、持続可能社会の構築のためには多くの障害があり、中でも経済優先の現代社会の意識変革は強く求められるものである。現代社会では人々の意識が経済に集中し、経済の安定が社会の中で何よりも重要なものと意識されている。しかし、本来、健全な環境が保たれない限り、社会を営むことも経済を運営することもできないはずである。

環境の悪化はなかなか目に見えず、悪化が明らかになるのに時間がかかる。また、その影響の大きさを適切に定量化して捉えることも現代科学では困難である。しかし、大気中の二酸化炭素濃度の上昇が止まらず、生物種の絶滅速度が異常な速さで続き、いつまでもきれいにならない湖や内湾の水質等の現状を考えた場合、環境と経済の関係を逆転させた持続可能社会への転換が強く求められているし、またそれが人類の存続にとって不可欠であると考えることの方が、現在の経済中心社会をそのまま運営していくよりもより適切である。

持続可能社会を支える持続可能性は、次の 3 つの視点から構成される。第 1 点は将来世代の持続性を保証する視点である。この点から見た場合、国の借金の増大を前提に行われているダム・河口堰等公共事業の実施は明らかに経済的に将来世代の利益や要求を損ねている。第 2 点は地球にともに生きる人々の持続性を保証する視点である。これは一般に南北問題と呼ばれる領域と考えればよく、水資源問題では上・下流問題となって表れている。上流地域の犠牲を前提にして初めて成り立つダム建設は、他の手段がある限り、採用すべきではないであろう[6]。また、特定の人々だけが豊かになるような経済システムはそもそも人類の基盤を形成するシステムとしてふさわしくない。第 3 点は地球にともに生きる生物の持続性を保証する視点である。水生生物の移動を遮断し、絶滅に追い込むことが不可避なダム建設はこの点からも避けるべき手段であることは明らかである。海岸部の干潟の埋め立ても、干潟の有する海洋生態系における不可欠な機能を補うことができない限りすべきではない。本稿で対象としている水辺環境の保全と地域振興の関係も、この視点からの検証を受けなければならない。

生物の持続可能性を保証することは、人の生きる基盤に健全な生物多様性が存在するという考え方に立った上で、実は人間社会の存続を保証することなのである。「人か環境か」や「開発か環境か」という対立的な視点ではなく、「人も環境も」や「環境保全を前提とした開発」という視点が、将来に向けて人間社会が基盤にすべき唯一の考え方である。

このように考えた場合、本研究は持続可能社会を支える持続可能性の第 3 の視点を具体的にフィール

ド事例から考えるきっかけになると考える。ただ、こうした視点を持った研究はまだほとんど存在しない。実は多くの研究がこの目的を目指して行われているのかもしれないが、成果が表れているとは言えないし、人間社会のシステムにおいて強い影響力を持つに至っていない。また、本研究をもって、この視点の全てを明らかにできるとも考えていない。本研究はそのほんの一部の解明を目指しているに過ぎない。しかも、研究は緒についたばかりで、本研究はそのスタート的位置づけにある。筆者らは今後、河童、龍といった神的存在、カブトガニ、鮭、鮎、ホタル等実在の水生生物を対象にして、全国で、そして世界で展開されている水辺環境保全運動の特徴を明らかにするとともに、それらによる地域振興の可能性を追求していく予定である。その際、地理学的分析視角の有効性を示すためにも、具体的な地域研究の中で地域社会のトータリティに注意を払った研究の有効性を示していきたいと考えている。

２．河童と地域振興

（１）河童と水辺環境保全、地域振興との関係

河童に関する研究は、これまで、石川純一郎（1974)、柳田国男[7)]（1976)、大島建彦編／竹田　旦著（1988)、若尾五雄（1989)、大野　桂（1994)、小松和彦編（2000)、歴史民俗学研究会編（2004)、和田　寛（2010、2012)、国立歴史民俗博物館・常光 徹編（2014）等をはじめとする民俗学を中心とする研究分野において大量の蓄積があり、郷土史研究においても全国各地の河童をめぐる物語の収集が行われている（原 1992、九州河童の会編 1993、広瀬 2017)。文学作品としては火野葦平の一連の河童小説があり（火野 1953 1954、1955a、1955b、1955c、1957)、絵本等児童向け作品もたくさん出版されている[8)]。

ただ、本研究はこれまでの河童研究が扱ってきた、河童が人間に対してどのような意味を持つのか、等について直接対象とする研究ではない。河童が水辺環境保全運動の象徴として扱われている実態や、その地域振興効果の有無を明らかにすることを目的としている。従って、本研究は必ずしも従来の河童研究の延長上に位置づけられるものではない。それよりも、水辺環境保全に関わる水資源・環境研究として、また、これまで人文地理学等の社会科学が担ってきた地域振興研究に、河童を用いた環境保全運動の有効性や、その経済的有効性を位置づけようとするものである。このように河童を手段として扱い、河童を用いた環境保全活動の特徴や、その経済的有効性を追求する研究はほとんど存在しない。

そうした中で注目されるのは、大野　芳を代表とする、河童と関わり、河童と遊ぶ、かっぱ村に関連した活動の報告である（大野 2000)。河童そのものへの関心だけでなく、河童と遊ぶ、河童で遊ぶ指向性が、現在、全国で行われている地域振興策、特にゆるキャラによる地域振興と似た性格を有している。筆者らの知る限り、そうした活動の多くは地域的広がりに欠け、個人的嗜好にとどまり勝ちであるが、近年のゆるキャラブームとあわせて考えると、その将来性を含め、大変興味深く、さらに検討をしていく価値があると考える。また、河童そのものがゆるキャラ化していることを指摘する研究も現れており（和田 2012、松村 2014)、これらは筆者らの考える河童による地域振興を目的とする研究と大きな関連性を有していると考える。

（２）河童伝説と地域振興の難しさ

ここで本研究の結論を先取りして言えば、河童による水辺環境保全は既に多くの成果を有し、一定程度地域に定着していると考えられる。全国各地の水辺地域において、水遊びに対する注意の呼びかけや、水辺への接近に警告を発する立て看板などに、河童の挿絵の入ったものが使われていることはかなり一般化していると考えられる。その上で、河童出没頻度の高い地域では、河童を地域の象徴として地域振興策に使用する例も数多く存在する（和田 2012)。しかし、水辺環境保全においてはその象徴として河

童が使用され、成功していると思えるものの、地域振興の象徴としての河童は、個々の地域において必ずしも高い経済的評価を得ておらず、河童による地域振興策は必ずしも成功しているとは言えないと思われる。また、次の理由によって、河童による地域振興は、今後も簡単ではないと考えている。

その理由の一つとして挙げられるのが、わが国における河童の普遍的存在性である。わが国では、河童は他の妖怪に比べて明らかに全国至るところに出没する。くまモンやひこにゃんといったゆるキャラが地域振興策として成功していることを考えれば、その理由にはもちろんキャラクターのユニークさがあるものの、それと同時にそのキャラクターの唯一性が挙げられよう。くまモンは熊本県のマスコットキャラクター、ひこにゃんは滋賀県彦根市のマスコットキャラクターであり、キャラクターと地域の結びつきが単一でかつ濃厚である。

それに対して、河童は現在、河童の町としてのイメージづくりに力を入れている地域が全国にたくさん存在する。例えば青森県津軽地方は水虎（河童）信仰が非常に盛んな地域であり、東日本の河童の本拠地とも呼ばれている。岩手県遠野市は柳田国男の遠野物語で有名になって以来、民俗学発祥の地、民話の故郷になっているが、その中でも河童と座敷童が最も有名でわかりやすい案内役になっている。宮城県色麻町、埼玉県志木市、茨城県牛久市、千葉県我孫子市、兵庫県福崎町等はいずれも河童と地域の関係を強調し、地域のイベントに積極的に河童を用いている（写真１、写真２）。福岡県久留米市田主丸町は西日本の河童の本拠地と呼ばれている。このように、河童は古くから日本人にとってなじみの深い妖怪であり、また、神に仕える存在であったからこそ、逆にある特定地域に固定化して語ることが難しいキャラクターなのである。

ただそうした中でも、青森県津軽地方や岩手県遠野市、福岡県久留米市田主丸町は、他の地域以上に河童の故郷や河童の本拠地と称せられるほど、地域と河童の結びつきが強固である。従って、河童と人間社会の様々な結びつきを考えていくにあたって、本研究では福岡県久留米市田主丸町を事例にして考えていくことにする。

（３）田主丸町の河童伝説

ａ）田主丸町の河童

福岡県田主丸町は 2005 年 2 月まで自治体として存在していた町である。2005 年 2 月 5 日、平成の大合併により、久留米市に編入され、現在は久留米市の一部となっている。筑紫平野に位置し、町の北部を筑後川が、町の真ん中を巨瀬川が流れている（図１）。

筆者らが本研究の対象地域として田主丸町を選んだのは、田主丸町が河童の本拠地、少なくとも西日本における河童の本拠地と呼ばれているからである。本拠地と呼ばれるだけあって、筑後川流域には古くから多くの河童が棲んでいる言い伝えがあった。中でも河童の大将である九千坊が田主丸町に棲むと言われており、町内には多くの河童伝説、河童に関わる施設が残されている[9)]。

ｂ）九千坊

河童の先祖は遠くパミール山地の一渓水、タクラマカン砂漠を流れるヤルカンド川の源流に棲んでいた[10)]。寒さと食料不足のため、河童たちは二隊に分かれて大移動を開始した。そして、一隊は中央ヨーロッパ、ハンガリーの首都ブダペストへ、もう一隊が日本にやってきた。日本にやってきた河童集団の頭目が九千坊である。九千坊は黄河を下り、黄海へ出た。そして泳ぎ着いたのが九州の八代の海である（写真３、写真４）。言い伝えでは今から約 1600 年前、仁徳天皇の時代である[11)]。

九千坊一族はまずは球磨川を安棲の地と定め、流域全域にその勢力を広めた。球磨川上流には浮与（うくよ）河童（がらっぱ）の言い伝えが残っており、人吉市の青井阿蘇神社境内には言い伝えの説明掲示がある（写真５）。

加藤清正が肥後の城主だった時、九千坊は清正が寵愛する小姓に懸想し、小姓を水底に引きずり込ん

図１．福岡県田主丸町中心部

出典）https://www.bing.com/images/search?view=detailV2&ccid=%2f9UM6xFP&id=FEFD07AF7AF84FE5EF02C8E5DB37E433FE47C11F&thid=OIP._9UM6xFP6d0YkemcIbeQHaFz&q=%e7%94%b0%e4%b8%bb%e4%b8%b8%e7%94%ba&simid=607995456619675856&selectedIndex=82&ajaxhist=0

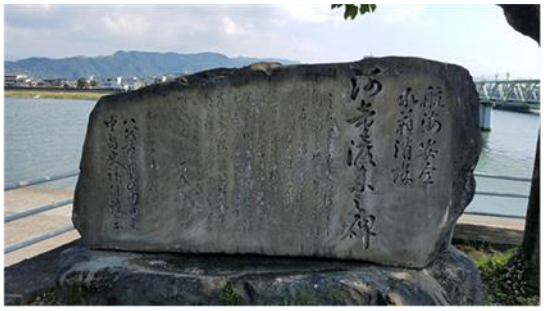

写真３　八代市にある河童渡来之碑

出典）筆者撮影 2017 年 8 月 30 日

写真４　河童渡来之碑横の河童像

出典）筆者撮影 2017 年 8 月 30 日

写真５　球磨川上流に棲む浮与河童

出典）筆者撮影 2017 年 8 月 28 日

で尻小玉を抜いて殺してしまった。清正は大いに怒り、九千坊一族を皆殺しにせんと九州全土の猿族を動員して九千坊を攻めた。これによって球磨川を追放された九千坊一族は水清く食べ物の豊富な筑後川に移り、久留米の殿様有馬家の許しを得て棲むことになり、水天宮の御護り役になった（写真６）。一時期、有馬様の参勤交代にあわせて江戸へ移りすんだこともあったが、水が合わず、筑後川の自然環境を懐かしがり、再び筑後川に戻り、今の田主丸町に永住したと言われている。

写真６　久留米の水天宮境内にある水神社

出典）筆者撮影 2017 年 11 月 26 日

ｃ）河童伝説

田主丸町の河童伝説は上述した九千坊を中心に数多く存在する[12]。昔、巨瀬川筋の水車小屋のところにある木製の水路の川樋の上で寝そべっていた河童「樋の上の弥五郎」が、あまりの暑さで皿の水が乾いてしまい、樋の上から巨瀬川に落ち、川に流されて死んでしまった。「河童の川流れ」ということわざはこれに由来すると言われている。

7 月の暑い日、田植えが終わり、村で田の神を送る祭りのさなぼり[13]の準備が行われていた。この地方では河童たちが田植えを手伝っており、庄屋は必ず宴会に河童を呼んでいた。宴会の準備をしていたお手伝いの女性は河童が大嫌いだったので、河童の食事の中に、竹の子の煮つけの代わりに硬い竹の根を入れて出した。河童たちは「人間は恐ろしい生き物だ。あんなに硬い竹の子をおいしそうに食べている」と思い、怖くなって庄屋の家から消えた。その後、二度と河童たちが田植えを手伝うことはなくなった。

昔、郡奉行の田口長ヱ門が田主丸をお供の者と見回りにやってきた。川の堰にさしかかると長ヱ門の乗っていた馬がピクリとも動かない。後ろにいたお供の者が「河童だ！」と叫んだ。長ヱ門が後ろを見ると、河童が馬の尻尾を渾身の力で引っ張っている。長ヱ門は馬の上から刀を抜き、河童の手を切った。家に帰り、長ヱ門は切り取った河童の手を煮えた湯に放り投げた。その晩、長ヱ門は外がうるさいので外を見ると、たくさんの河童が館を取り囲み、切り取った手を返して欲しいと言う。切り取った手がつながるかと聞くと、「河童には切れた手でも元通りになる河童切傷全膏薬がある」と答えるので、「河童の手は煮込んだ湯につけてこのとおりだ」と言って、変色した河童の手を見せた。河童たちは手を取り戻すことをあきらめて、哀れな姿で川へ帰っていった。

写真７　久留米の水天宮のお守りのひょうたん

出典）筆者撮影 2018 年 3 月 1 日

昔、大干ばつの年、雨が何日も降らず困っていた。すると１匹の河童が現れ、庄屋に向かって「明日の朝までに堤に水を一杯にしてあげます」と言う。翌日、庄屋が堤を見ると、堤の中は水であふれかえっ

ていた。庄屋は河童に深く頭を下げ、「何かお礼をしたい」と言うと、河童は「庄屋には 2 人の娘がおるが、どちらかを嫁に欲しい」と言った。庄屋は大変困ったが、二女が「村の恩人でもあり、私が嫁に行きます」と言う。庄屋はひょうたんで花嫁衣裳を作り、二女に着せて河童に差し出した。河童はひょうたんの衣装を着た二女を水の中に連れて行こうとするが、すぐに浮いてきてしまって連れていけない。とうとう河童は花嫁をあきらめざるを得なかった。この話から久留米の水天宮のお守りはひょうたんになった（写真７）。

（４）河童と現在の田主丸町の関係

ａ）火野葦平と河童族

芥川賞作家火野葦平は 1931 年に田主丸町を訪れると、鯉獲り名人の鯉とりまーしゃんの鯉獲りの姿に強く惹かれ（写真８）、その後たびたび田主丸町を訪れるようになる [14]。そして田主丸町の河童伝説をノートに書き留めては「河童曼陀羅」など 43 編の小説を書いた [15]。

1955 年の夏、葦平をはじめとする九州文学会同人たちが田主丸町に遊んだ際、彼らを顧問にして河童族を結成しようという話が盛り上がり、7 月 13 日、会員 11 人で「九千坊本山田主丸河童族」を発足させた。会費は「きゅうり代、皿用特急水」と、遊びの精神に満ちあふれ、酒を片手に夢を語るグループであった。河童族が掲げた仕事は、河童雑誌『九千坊』発行、放談会の開催、河童碑、河童大明神の建設、河童祭りの主催、河童土産品の研究、その他河童文化昂揚事業であり、こうした活動の中で田主丸町名物「かっぱのへそ」（写真９）、「かっぱ饅壽」（写真 10）が誕生した。

その後、火野葦平の死去等もあり、一時期活動は低迷していくものの、1980 年代に入ると、町内の若手が立ち上がり、再び活動が活発化していく。1982 年には子河童族が誕生し、1986 年の旧正月には第二世代の河童族がスタートした。その時、河童族を受け継ぐにあたって初代河童族と約束したことは、河童を祭る祠を立てることと、河童みこしを作って祭りを催すことであった。これは後に実現されていく。

写真８　鯉とりまぁしゃんの家族が経営する料理屋の包装紙

写真９　河童のへそ

写真 10　河童饅壽

出典）写真 8～10 とも筆者撮影 2017 年 11 月 25 日

ｂ）河童族の活動

現在、河童族はこの約束を守るために、河童を祭る祠を巨瀬川中央橋上流の巨瀬川左岸に設置した。祠は「河童大明神」と名付けられ、毎年８月８日に祭りを開催している[16)]。メインイベントは田主丸小学校の生徒がみこしを担いで町内や巨瀬川を練り歩く「子河童みこし」で、夏の風物詩になっている。そのほか水上ブランコ、カヌー体験といった川遊び、水上ステージでのカラオケなど、水にまつわる遊びであふれている。夜には花火大会も行われている。河童族の現在の主な活動は、旧正月にその年の頭領を決める催し「頭渡し」を行い、春は花見、夏には上述の大祭を開き、秋は月見を行っている。2015 年時点のメンバーは 32 人で、全員に河童名がつけられている。

ｃ）田主丸の河童関連施設

田主丸には古くから河童に関連した施設が数多く存在する。その第一は河童を祭った神社の存在である。船越校区小川の河童大明神、田主丸校区東町の馬場之瀬宮（写真 11）、川会校区志床の神社、川会校区唐島の川ん殿社、川会校区今村の神社（河童よど、ボクリよど）など、河童にまつわる神社が多い（行徳 1970）。

新暦の 7 月 10 日は田主丸町今村の徳満神社の祭りで、別名「ボクリよど」または「河童よど」と呼ばれている。その由来は、この祭りの日には必ず雨が降り、高下駄が必要なこと、筑後では高下駄のことをボクリと言い、ここから名前がついた。昔、今村の庄屋の酒蔵から酒が日に日に減っていった。それに気づいた庄屋が見張っていると、ある晩、酒ガメの上に黄金の御幣をもった白髭の爺が立っていて、

写真 11　馬場之瀬宮

写真 12　馬場之瀬宮の祭神

写真 13　橋の上の河童

写真 14　交差点の河童

写真 15　JR 田主丸駅

出典）写真 11～15 とも筆者撮影 2016 年 5 月 30 日

「我は徳満神社の神である。我を祀ってくれたら今後この里から水難がなくなるだろう」と言ったのち、河童の姿になって消えた。庄屋はさっそく徳満神社を奉った。その祭りを「河童よど」と言う[17]。また、田主丸校区東町の馬場之瀬宮は、祭神が水罔女神で、本殿にかかっている絵にはその両脇に九千坊と沙悟浄[18]が立っている（写真 12）。

田主丸にはあらゆるところに河童の像や絵があり、その数は 300 を超えるという（写真 13、写真 14）。その姿も灯火を持っていたり、相撲していたり、さまざまである。1953 年の水害の時に、祀られていた木像の河童大明神が流されたため、その後、石像として安全祈願で建立されたのが始まりである。ＪＲの駅舎も河童の形をしており（写真 15）、町の中心部の交差点横にある公衆トイレにも久留米市のマスコットキャラクターのくるっぱが描かれており（写真 16）、河童の手なるものも保存されている（写真 17）。そして今では町のどこを歩いていても河童に出会うことができる。

写真 16　福岡県久留米市のマスコット
キャラクター・くるっぱ

写真 17　河童の手

出典）写真 16・17 とも筆者撮影 2016 年 5 月 30 日

３．田主丸におけるアンケート調査結果

（１）アンケートの方法

今回の調査はアンケート用紙（文末「参考」に提示）を準備し、調査員が聞き取りの形でメモを取る方式とした。調査日時は 2017 年 11 月 25 日（土）の 10 時 30 分から 17 時にかけてである。アンケート調査の調査員は法政大学大学院人文科学研究科地理学専攻の大学院生を中心とした 16 人に依頼した。また、調査対象は原則として田主丸町で小売店、飲食店などで働いている人である。上記調査時間内で営業している小売店、飲食店に調査員が直接訪問し、アンケートを依頼する形をとった。最終的なアンケート回収枚数は 73 枚（回答者 73 人）である。聞き取りの形をとったため、質問の回答において多少の無回答が生じたものの、73 枚全てが有効回答となっている。以下では質問項目に従って単純集計結果を中心に見ていく。より詳細な分析が必要と思われる場合は、クロス集計による分析を行った。

（２）アンケート対象者の属性

まずはアンケート対象者の属性を、性別、年齢別、職業別、居住歴別について見ていく。

ａ）性別回答者数

表 1 はアンケート回答者の男女別人数を示したものである。アンケート回答者 73 人のうち、男性が 41 人、56.2%、女性が 32 人、43.8%であった。男性の方が少し多い結果となった。

表１　男女別回答者数

（人・%）

男	女	総計
41	32	73
56.2	43.8	100

出典）アンケート調査より作成

（以下、すべてアンケート結果のため、出典を省略）

表２　年齢別回答者数

（人・%）

20歳～39歳	40歳～59歳	60歳以上	総計
11	17	45	73
15.1	23.3	61.6	100

ｂ）年齢別回答者数

表２はアンケート回答者の年齢別人数を示したものである。アンケート回答者 73 人のうち、20 歳～39 歳が 11 人、15.1%、40 歳～59 歳が 17 人、23.3%、60 歳以上が 45 人、61.6%と、圧倒的に年齢層の高い結果となった。今回のアンケート調査が土曜日の日中に行われ、しかもその時間帯に営業している小売店、飲食店を中心に訪問する形を基本的に採用したため、サラリーマン層が排除された結果であると考えられる。従って、本調査は田主丸町の主として高齢者層の意見を集約する形となった。

ｃ）職業別回答者数

表３は職業別アンケート回答者数を示したものである。アンケート調査票では具体的な職業、業種を聞いたため、それを集計し直したが、回答レベルの異なるものもあり、少しわかりにくい区分になっている。最も多かったのが小売業で 26 人、35.6%であった。続いてサービス業に分類されたのが 12 人、16.4%と、一般・無職が同じく 12 人、16.4%である。ここで一般とは本来ならば調査対象から外れるサラリーマン等が該当する。店舗でアンケートを依頼したとき、同席しており、一緒に答えてくれた人たちである。無職は主に定年退職者をさす。次に多かった加工販売とは、菓子屋等のことである。これを小売業に含めると、回答者のうち半数近くが小売業となる。飲食業の次に来る自営業については、詳細は分からないため、そのままにした。全体として見ると、総数の 80%程度が小売業、サービス業、飲食業等の自営業[19]であると思われる。

表３　職業別回答者数

（人・%）

小売業	26	35.6
サービス業	12	16.4
一般・無職	12	16.4
加工販売	8	11.0
飲食業	8	11.0
自営業	4	5.5
製造・建築	3	4.1
総計	73	100.0

ｄ）居住歴別回答者数

表４は居住歴別アンケート回答者数を示したものである。全体の 78.1%、57 人が 30 年以上の居住歴を誇る。20 年以上だと全体の 90%に及ぶ。回答者全体の年齢構成が高いことと合わせて、アンケート調査を行った田主丸町の中心部が移動の少ない定住社会であることを示していると思われる。

表４　居住歴別回答者数

（人・%）

5年未満	5年～10年未満	10年～20年未満	20年～30年未満	30年以上	無回答	総計
3	3	1	8	57	1	73
4.1	4.1	1.4	11.0	78.1	1.4	100.0

（３）河童を使ったイベントの直接的経済効果

では、具体的にアンケート調査の結果を見ていく。まずは河童を使ったイベントの地域振興効果を中心とした経済的側面について見ていこう。表５は田主丸町における河童を使ったイベントの地域振興効果を直接聞いたものである。内容を見ていくと、地域振興効果が高いと答えている人は 16 人、21.9%、

表５　田主丸町における河童を使ったイベントの地域振興効果は高いと思いますか。

（人・%）

高い	16	21.9
どちらかと言えば高い	12	16.4
どちらとも言えない	16	21.9
どちらかと言えば低い	9	12.3
低い	5	6.8
わからない	13	17.8
その他	1	1.4
無回答	1	1.4
総計	73	100.0

どちらかと言えば高いと答えている人が 12 人、16.4%、両者を合わせると全体の 1/3 を超える程度であった。それに対して地域振興効果が低いと答えた人は 5 人、6.8%、どちらかと言えば低いと答えた人が 9 人、12.3%と、否定的な人は全体の 20%程度である。どちらとも言えない、わからないと答えた人がそれぞれ 16 人（21.9%）、13 人（17.8%）、計 29 人（39.7%）と、高いと答えている人の割合と同程度存在した。これを見る限り、多くの人にわかりやすく良く見える形で地域振興効果が出ているとは言えない。

これについてもう少し具体的に見ていくために、河童を使ったイベントによる地域への影響を、「観光客が増えた」、「町の名前が有名になった」、「田主丸町の人々が元気になった」、「経済的に潤った」、「町の人々の交流が増えた」の 5 項目について質問を行った。回答は真ん中の評価を「どちらとも言えない」とし、「はい」、「いいえ」のどちらとも 2 段階の強度で回答を求める 5 段階評価とした。表 6 がその回答結果である。

表６　河童を使ったイベントによる地域への影響についてあなたのお考えをお聞かせください。

（人・%）

	はい +2	+1	どちらとも言えない ±0	−1	いいえ −2	無回答	総計
観光客が増えた	7	5	15	5	34	7	73
町の名前が有名になった	13	17	11	5	20	7	73
田主丸の人々が元気になった	19	10	19	2	15	8	73
経済的に潤った	6	11	16	5	29	6	73
町の人々の交流が増えた	23	16	14	1	12	7	73
	はい +2	+1	どちらとも言えない ±0	−1	いいえ −2	無回答	総計
観光客が増えた	9.6	6.8	20.5	6.8	46.6	9.6	100.0
町の名前が有名になった	17.8	23.3	15.1	6.8	27.4	9.6	100.0
田主丸の人々が元気になった	26.0	13.7	26.0	2.7	20.5	11.0	100.0
経済的に潤った	8.2	15.1	21.9	6.8	39.7	8.2	100.0
町の人々の交流が増えた	31.5	21.9	19.2	1.4	16.4	9.6	100.0

表 6 を見ると、全体としてプラスの影響が強く出ているのは「町の人々の交流が増えた」項目で、「はい」と肯定的に答えた人の割合が全体の 5 割を超えている。続いて「田主丸町の人々が元気になった」項目も、＋2 の強い「はい」が 26.0%と、全体の 1/4 を超えている。「はい」全体では 4 割程度となっている。「町の名前が有名になった」項目も、強い肯定は 13 人、17.8%と決して高くはないが、「はい」全体では 40%を超えており、比較的肯定の割合が高い項目である。

一方、「観光客が増えた」、「経済的に潤った」項目では、どちらも - 2 の強い「いいえ」が全体の 40%前後を占めており、「どちらとも言えない」まで含めると 6 割を占める。肯定的な回答は 20%前後にとどまっており、全体として否定的な傾向の強い結果となった。

これらから明らかになるのは、河童を使ったイベントの地域振興効果は、主として田主丸町の人々の

交流を活発にしたり、人々を元気にさせるという、どちらかと言えば経済的側面においては間接的な側面において、その効果が見られるものの、観光客の増加や経済的に潤ったという、直接的な経済効果についてはあまり良い結果が出ていないと言えそうである。ただそうした効果が出ていないとされる直接的な経済効果においても、少なくとも 10%近くの人が強い肯定を示しており、一部の人々には一定の直接的経済効果が現れていると考えることができる。この点についてさらに詳しく見ていく。

実は「経済的に潤った」項目の回答者を男女別で見ると、肯定的に答えている人の割合が、男性では 36.6%と、決して低くない。さらに年齢別から見ると、40 歳から 59 歳の年齢層において+2 の強い肯定を示している人の割合が 23.5%と、1/4 近くの割合を占めている。これはかなり直接的に経済効果を実感している人がいることを想像させる。

ここで表 7 を見てみたい。表 7 は回答者の経営する、または勤務する事業所が河童に関連した商品の製造・流通・販売を行っているかどうかを聞いた質問の回答である。73 人のうち 8 人、11.0%の人が河童に関連した商品の製造・流通・販売を行っていると回答している。これは河童による直接的な経済効果を示していると言えるであろう。この値、割合を小さい、少ないと解釈するのは簡単であるが、直接的な経済的側面においても、河童の果たす積極的な役割は決してゼロではないことは明らかである。

表 7　あなたの事業所は河童に関連した商品の製造・流通・販売を行っていますか。

（人・%）

している	8	11.0
していない	58	79.5
その他	5	6.8
無回答	2	2.7
総計	73	100.0

（4）河童イベントを評価する住民とイベントを支える人々

前節で見てきたように、田主丸町において河童を使ったイベントの地域振興効果は、主として田主丸町の人々の交流を活発にしたり、人々を元気にさせるという、経済効果においては間接的側面において、比較的明確に明らかになった。この点について、本節でより詳しく見ていきたい。表 8 は田主丸町で河童を使ったイベントが行われていることに対して、どのように考えるかを聞いたものである。ここで言う河童を使ったイベントとして回答者が想定している内容は表 9 に示されている。表 9 を見ると、アンケート回答者の 2/3 程度が河童のイベントとして想定しているのは、田主丸町の有志によって組織された河童族が 8 月 8 日に開く河童祭りのことである[20)]。2 番目に多い耳納の市は 11 月に開催されるイベントであり、そこに河童族が出店していることから、一定の回答者数を得たものと思われる。

表 8 において「良いことである」「どちらかと言えば良い」の回答者数は合計で 60 人、全体の 82.2%

表 8　田主丸町で河童を使ったイベントが行われていることに対して、あなたはどのように考えますか。

（人・%）

良いことである	54	74.0
どちらかと言えば良い	6	8.2
どちらとも言えない	1	1.4
どちらかと言えば良くない	0	0.0
よくない	0	0.0
わからない	7	9.6
無回答等	5	6.8
総計	73	100.0

表９　田主丸町で行われている河童イベント

（人・%）

河童祭り	47	64.4	河童大明神
耳納の市	10	13.7	
河童ウォーキング	3	4.1	河童マラソン大会
河童族の花見と月見	1	1.4	
文化祭	1	1.4	
神社で河童祭り	1	1.4	
水神祭り	1	1.4	
虫おい祭り	4	5.5	
花火大会	1	1.4	
学校行事で河童〇〇	1	1.4	
知らない	16	21.9	
川の堤防に河童の絵	1	1.4	
総計	73	100.0	

に達している。「よくない」「どちらかと言えば良くない」という否定的な回答をした者はいない。もちろん、表９で何らかの河童イベントを答えた人の数よりも、表８での肯定的な回答者数の方が多いことから、表８の肯定的意見の中には、河童族が８月８日に開く河童祭りのような既存イベントを特定して答えたわけでは必ずしもなく、一般的傾向として肯定的に答えた人がいることも否定できない。しかし、田主丸町が河童を使ったイベントに取り組んでいることに対して、そのことをよく知らない人も含めてほとんどの人が肯定的に見ているということは、田主丸町の人々の間に、共通した河童肯定の強い意識があることを示している。

一方、表 10 は全国で行われている河童イベント、またそれを使った地域振興に対しての意見を聞いたものである。田主丸町が参考にすべき事例があるかという質問に対して、「知らない」という人が 52 人、71.2%と圧倒的であるという結果となった。ただ、その上で注目されるのは、参考にすべき事例が「ある」と答えた人が 5 人に対して、「ない」と答えた人が 13 人と、「ある」を大きく上回ったことである。また、「ある」と答えた人も、その理由を見ると、一般論としての学ぶ姿勢を述べたものばかりで、具体的な地域名を挙げて答えた回答はない。つまり、田主丸町で河童によるイベントを担っている人、関心を持っている人を中心に、田主丸町の河童イベントが日本の中でも有数の存在であるという強い自負心が表れていると思われる。そしてこうした強いた自負心は上述の結果を見る限り、田主丸町の地域住民全体に支えられていると言えよう。

表 11 は河童イベントへの具体的な関与内容を示している。その中で「ほとんど関わっていない」と答えた人が 46 人、63.0%を占めた。「わからない」「無回答」を含めると、全体の 80%を超える。一方、「積極的に関わっている」「普通に関わっている」人はそれぞれ 18 人、9 人、計 27 人で、全体の 37.0%である。少ないと言えるかもしれないが、全体の 1/3 を超える人が事業として、また個人として河童イベントに関わっていると答えていることは注目してよい。

表 10　日本では全国各地で河童を用いた地域振興や地域おこしが行われています。田主丸町が参考にすべき地域の事例がありますか。

（人・%）

ある	5	6.8
ない	13	17.8
わからない	52	71.2
その他	2	2.7
無回答	1	1.4
総計	73	100.0

表 11　あなたの事業所、またはあなたはこうしたイベント、お祭りに関わっていますか。

（人・%）

積極的に関わっている	18	24.7
普通に関わっている	9	12.3
ほとんど関わっていない	46	63.0
わからない	9	12.3
無回答	6	8.2
総計	88	120.5

さらに関わり方の内容を聞いたものが表 12 である。こちらでは延べ 32 人、43.8%、複数回答を除く純人数が 28 人、38.4%が関わり方の内容を答えている。多い順から、「イベントに参加」が 12 人、16.4%、「その他」が 10 人、13.7%であり、より積極的な関与を示しているのは、「寄付金を提供」「商品・サービスを提供」の各 5 人、6.8%である。両社の合計は 10%を超え、決して多いとは言えないが、ある程度の金銭負担を前提に河童イベントに関わっている人たちの存在を確認することができる。恐らく既述した田主丸町の河童族の人々がこうしたコアの存在として田主丸町の河童イベントを支えており、それを強弱はあるにしても田主丸町の地域住民の多くが肯定的に見ている状況を想像することができる。

表 12　河童イベントへの関わりかたの内容

（人・%）

寄付金を提供	5	6.8
商品・サービスを提供	5	6.8
イベントに参加	12	16.4
その他	10	13.7
総計（延べ）	32	43.8
総計（単独）	28	38.4

（５）田主丸町の河童は水辺を守っているか

本節では、田主丸町の人々が河童を通じて水辺環境保全にどのように関わっているか、また、その意識はどうなっているかを明らかにしていく。表 13 は田主丸町にいるとされている河童が地域の水辺環境の保全に関わっているかという点を直接聞いてみたものである。その結果、「守っている」「どちらかと言えば守っている」がそれぞれ 34 人、16 人、46.6%、21.9%を占め、両者の合計は全体の 2/3 を超えた。「あまり守っていない」「守っていない」は合計で 8 人と、全体の 10%程度にとどまった。

続いてそうした河童のいる水辺を守りたいか、という質問に対しては、「守りたい」50 人、68.5%、「どちらかと言えば守りたい」6 人、8.2%と、両者で全体の 76.7%が「守りたい」と答えている（表 14）。「河童を信じていないので、何とも言えない」という、河童伝説を否定する選択肢を入れてみたが、この選択肢を選んだ人は 5 人、6.8%にとどまった。もちろん、本当に信じているかどうかは別にして、河童との関係をある程度認めた上で水辺環境を守りたいと答えている人が全体の 2/3 を占めていることは、田主丸町の河童伝説が水辺環境の保全意識と強く関わっていることを想定させる。

そして表 15 によって、河童伝説の肯定否定とは関係なく、住民による河童を使った地域振興活動によって田主丸町の水辺環境が保全されているかという、地域振興策と水辺環境保全のより直接的な関係を聞いたところ、河童を使った地域振興策によって「水辺環境がきれいになった」と答えている人が 28 人、38.4%、「少しきれいになった」と答えた人は 12 人、16.4%に上った。両者を足すと 40 人、54.8%

表 13　田主丸町の河童は水辺を守っていますか。

（人・%）

守っている	34	46.6
どちらかと言えば守っている	16	21.9
どちらでもない	7	9.6
あまり守っていない	5	6.8
守っていない	3	4.1
わからない	4	5.5
河童を信じていないので、何とも言えない	3	4.1
無回答	1	1.4
総計	73	100.0

表 14　あなたは河童のいる水辺を守りたいと思いますか。

（人・%）

守りたい	50	68.5
どちらかと言えば守りたい	6	8.2
どちらでもない	2	2.7
あまり守りたいとは思わない	1	1.4
守りたいとは思わない	3	4.1
わからない	5	6.8
河童を信じていないので、何とも言えない	5	6.8
無回答	1	1.4
総計	73	100.0

表 15　あなたは田主丸町の河童による地域振興、地域おこしによって、田主丸町の水辺がきれいになった、またはきれいになったと思いますか。

（人・%）

きれいになった	28	38.4
少しきれいになった	12	16.4
どちらとも言えない	8	11.0
あまりきれいになっていない	5	6.8
きれいになっていない	4	5.5
よくわからない	8	11.0
その他	6	8.2
無回答	2	2.7
総計	73	100.0

に上る。筆者らはこれを大変高い数字であると考える。

（６）田主丸町の人々の河童に関する基礎知識の高さ

アンケート調査分析の最後の項目として、田主丸町住民の河童に対する意識をまとめてみた。表 16 は河童伝説を知っているか否かについて聞いた結果である。「よく知っている」と答えた人が 10 人、13.7%、「それなりに知っている」と答えた人が 33 人、45.2%、両者の合計は 43 人で 58.9%であった。一方、「あまり知らない」「全く知らない」と答えた人は 17 人と 10 人で、それぞれ全体の 23.3%、13.7%、両者の合計は 27 人、37.0%であった。これを見ると、河童伝説を知っている人が知らない人よりもかなり多いことが分かる。

続いて表 17 は河童の存在を信じるか否かについての回答である。「信じる」と答えた人が 20 人、27.4%、「信じない」と答えた人が 23 人、31.5%、「どちらでもない」「わからない」の合計が 22 人、30.1%と、信じる人と信じない人、さらには半信半疑とわからない人がほぼ拮抗した割合となった。これをどのように解釈したらよいかは不明である。しかし、筆者らは「信じる」と答えた人が全体の 1/4 を超え、「信じない」「半信半疑、わからない」という人たちの割合と拮抗している点に注目したい。田主丸町という限られた地域においてではあるが、一定の広がりを持つ地域において、半数以上の人が河童伝説を知っており、全体の 1/4 程度の人が河童の存在を信じている。田主丸町の河童による水辺環境保全、さらには河童による地域振興は、こうした人々の存在によって支えられているとこは間違いない。

表 16　あなたは田主丸町の河童伝説を知っていますか。

（人・%）

よく知っている	10	13.7
それなりに知っている	33	45.2
あまり知らない	17	23.3
全く知らない	10	13.7
その他	2	2.7
無回答	1	1.4
総計	73	100.0

表 17　あなたは河童の存在を信じますか。

（人・%）

信じる	20	27.4
信じない	23	31.5
どちらでもない	15	20.5
わからない	7	9.6
その他	7	9.6
無回答	1	1.4
総計	73	100.0

５．まとめ

以上、主にアンケート調査の結果を分析しながら、福岡県久留米市田主丸町における河童による地域振興策、水辺保全策について述べてきた。筆者らは本報告の前半部分で河童による水辺環境保全効果は高いものの、地域振興効果は低いという予想を述べた。全体としてはこの予想はそのまま妥当すると言えよう。九千坊が暮らすわが国の河童の本拠地とも言える田主丸町においてでさえ、河童が地域振興策

の強力なエンジンとなることは相当難しいことが明らかになった。

しかし、本文中でも述べてきた通り、地域振興効果は決してゼロではないことも本報告で明らかになった。しかも、40 歳～59 歳の壮年層の男性において 1/３程度が一定の経済効果を認めていることは注目されていい。河童による水辺環境保全効果は今回のアンケート調査で強く認められていることからも、そうした水辺環境保全運動の延長で、何らかの取り組みが行われていけば、地域振興効果に繋がっていく可能性が見えたと言えよう。

しかし、その道は大変厳しいものであろう。やはり、経済合理性から外れ、地域の保守的な意識から離れ、思い込みであろうとも河童への想いを抱き続けることのできる、いわゆる「よそもの、若者、バカモノ」の継続的な確保が強く求められていると思われる。

そして何よりも求められているのは、田主丸町の地域住民の 1/4 程度の人が信じている河童の出現なのかもしれない。今回の調査では明らかにすることはできなかったが、実在の水生生物と、実在が証明されていない河童に関わっての活動の違いは、実在が証明されていない分、河童イベントに関わる活動にはロマンが伴っていると思われる。いつかは現れるかもしれない河童をひたすら信じ、その活力を維持し続けることのできるのも、このロマンがあってのことであると考える。

注.

1) 筆者らは大分県の水環境を地域資源の点から捉え、その整理を行ったことがある（伊藤 2007）。
2) この他、ベトナム、ドイツ等の水辺環境改変問題とその保全運動へもこれまでアプローチしてきた。
3) 当時は建設省であった。
4) 建設省の論理は、部分の説明も誤っていた。
5) 本段落は伊藤（2015）を引用し、修正したものである。
6) この点については、2003 年 1 月、淀川水系流域委員会によって提出された「新たな河川整備をめざしてー淀川水系流域委員会提言ー」の中で、「ダムは、自然環境に及ぼす影響が大きいことなどのため、原則として建設しない」と、適切に述べられている（淀川水系流域委員会 2003）。
7) 『遠野物語』が最初に発表されたのは 1910 年である。
8) 例えば、たかしよいち文／斎藤博之絵（1979）、若林一郎文／西山三郎絵（1986）、ヒサクニヒコ作・絵（1993）、小沢さとし文／橋爪まんぷ絵（2013）など。
9) 本項は、田主丸町の河童族が作成したと思われる、田主丸町の河童伝説に関するチラシ「河童伝説」「田主丸の河童」による。出典は、『九千坊由来記』（1956 年福岡河童会発行、『九州の河童』所蔵）となっている。
10) 本項は、田主丸町の河童族が作成したと思われる、田主丸町の河童伝説に関するチラシ「河童伝説」「田主丸の河童」による。
11) 田主丸町には、このほか平清盛が河童となって棲んでいるという伝説もある。この平清盛河童が久留米の水天宮に祭られている妻の二位尼（平　時子）に会いに行く時に、筑後川の水害が起きると言われている。
12) 本項は、田主丸町の河童族が作成したと思われる、田主丸町の河童伝説に関するチラシ「河童伝説」「田主丸の河童」と、河童族誕生 60 周年記念のパンフレット『九千坊本山田主丸河童族誕生 60 周年祝の会』（2015 年 11 月 29 日）により作成した。
13) さなぼりは、本来、田植の後の田の神を送るための祭事であったが、のちに田植終わりの祝いや休養日と考えられるようになった。さなぶり、さのぼりとも言う。
14) 本項は、西日本新聞 2015 年 12 月 19 日記事による。
15) 河童に関する小説、随筆に、『河童漫筆』、『河童ものがたり』、『河童曼荼羅』、『河童』、『蕎麦の花』、『随筆集　かっぱ十二話』等がある。

16）本項は、田主丸町の河童族が作成したと思われる、田主丸町の河童伝説に関するチラシ「河童伝説」「田主丸の河童」と西日本新聞 2015 年 12 月 19 日記事による。

17）本段落は、田主丸町の河童族が作成したと思われる、田主丸町の河童伝説に関するチラシ「河童伝説」「田主丸の河童」による。

18）沙悟浄は、元々は天界の役人で天帝の御側役の一人であった。天帝の宝を割った罪で天界を追われ、下界に落とされ、流沙河で妖仙となった。川の神である河伯と呼ばれることがあり、中国の『西遊記』では、沙悟浄は河伯とされる。日本の『西遊記』では、沙悟浄は河童であるが、河伯とは直接の関係はない。

19）自営業であるという判断は、筆者らによる現地観察による。

20）表 9 では複数のイベントに対して回答を求めたため、総数は 73 を超えている。

参考文献

淺野敏久・金　科哲・伊藤達也・平井幸弘（2009）「環境問題論争における空間スケールに応じた争点の相違と運動の連帯－韓国・セマングム干拓問題を事例として－」地理学評論 82-4、pp. 277～299

淺野敏久・金　科哲・伊藤達也・平井幸弘・香川雄一（2011）「韓国の干潟開発論争地の「その後」にみる「持続可能な開発」」地理科学 66-4、pp. 183～202

淺野敏久・金 科哲・伊藤達也・平井幸弘・香川雄一（2013）「日本におけるラムサール条約湿地に対するイメージ：インターネット調査による」環境科学研究（広島大学）8、pp. 53～67

淺野敏久・金　科哲・伊藤達也・平井幸弘・香川雄一・フンク カロリン（2015）「ラムサール条約湿地におけるイメージの日韓差：韓国の厳しい湿地保護制度が受容される背景」地理科学 70－2、pp. 60～76

淺野敏久・金 科哲・平井幸弘・香川雄一・伊藤達也（2013）「ラムサール条約湿地・ウポ沼（大韓民国）の環境保全と住民」E-journal GE08-2、pp. 223～24

淺野敏久・李　光美・平井幸弘・金　科哲・伊藤達也（2011）「中国・太湖の富栄養化問題と 2007 年のアオコ大発生事件（利水障害）後の対応」E-journal GE05-2、pp. 138～153

石川純一郎（1974）『河童の世界』時事通信社、283p

伊藤達也（1997）「ダムによる水資源開発の論理とその問題点」金沢大学文学部地理学報告 8、pp. 1～16（伊藤 2005 所収）

伊藤達也（2005）『水資源開発の論理－その批判的検討－』成文堂、207p

伊藤達也（2006a）『木曽川水系の水資源問題－流域の統合管理を目指して－』成文堂、375p

伊藤達也（2006b）「セマングム干拓問題－韓国の環境問題の現場から－」水資源・環境研究 18、pp. 117～125

伊藤達也（2007）「大分の水環境と地域資源－内発的発展との関係から－」金城学院大学人文・社会科学研究所紀要 11、pp. 31～49

伊藤達也（2008）『水資源計画の欺瞞－木曽川水系連絡導水路計画－』ユニテ、154p

伊藤達也（2011）「河川行政の見直しと科学技術」pp. 151～170（所収　吉岡　斉編『新通史　日本の科学技術　第１巻』原書房、574p）

伊藤達也（2015）「環境問題への地理学のかかわり」pp. 255～273（所収　竹中克行編『人文地理学への招待』ミネルヴァ書房、296p）

伊藤達也（2017a）「韓国の水辺環境改変事業の特徴－韓国４大河川再生事業を事例に－」地理科学 72-3、pp. 120～133

伊藤達也（2017b）「長良川河口堰と水資源研究」水資源・環境研究 30-2、pp. 23～25

伊藤達也・在間正史・富樫幸一・宮野雄一（2003）『水資源政策の失敗－長良川河口堰－』成文堂、207 p

大島建彦編／竹田 旦著（1988）『河童（双書フォークロアの視点 1）』岩崎美術社、216 p

大野　桂（1994）『河童の研究』三一書房

大野　芳（2000）『河童よ、きみは誰なのだ－かっぱ村村長のフィールドノート－』中公新書、212 p

小沢さとし文／橋爪まんぷ絵（2013）『絵本伊那谷ものがたり２　河童の妙薬』白鳥舎、48p
環境省自然環境局野生生物課（2014）「絶滅のおそれのある野生動植物種の生育域外保全」（http://www.env.go.jp/nature/yasei/ex-situ/step0.html）（2018 年 3 月 8 日検索）
行徳平八（1970）『田主丸地方の河童』19ｐ
九州河童の会編（1993）『九州河童紀行』葦書房、277p
九千坊本山田主丸河童族（2015）『九千坊本山田主丸河童族誕生 60 周年祝の会』
国立歴史民俗博物館・常光 徹編（2014）『河童とはなにか（歴博フォーラム民俗展示の新構築）』岩田書院、323p
小松和彦編（2000）『怪異の民俗学（３）河童』河出書房新社、435p
須藤和夫（1985）『三面川サケ物語』朔風社、185ｐ
たかしよいち文／斎藤博之絵（1979）『河童九千坊』西日本図書館コンサルタント協会、32p
原　美穂子（1992）『遠野の河童たち』風琳堂、189p
ヒサクニヒコ作・絵（1993）『カッパの生活図鑑』国土社、39p
火野葦平（1953）『河童』早川書房、231p
火野葦平（1954）『河童漫筆』朋文社、159p
火野葦平（1955a）『蕎麦の花』河出書房、204p
火野葦平（1955b）『随筆集　かっぱ十二話』学風書院、275p
火野葦平（1955c）『河童ものがたり』新潮社、223p
火野葦平（1957）『河童曼荼羅』四季社、574p
広瀬　伸（2017）『水虎様への旅－津軽の水土文化－』津軽書房、256p
松村薫子（2014）「河童の町おこし－キャラクター化する河童－」pp.299～319（所収　国立歴史民俗博物館・常光 徹編（2014）『河童とはなにか（歴博フォーラム民俗展示の新構築）』岩田書院、323p）
柳田国男（1976）『遠野物語・山の人生（改装版）』岩波文庫、330p
横川　健（2005）『三面川の鮭』朝日新聞社、179p
遊磨正秀・生田和正（2000）『ホタルとサケ－とりもどす自然のシンボル－』岩波書店、162ｐ
淀川水系流域委員会（2003）「新たな河川整備をめざして－淀川水系流域委員会提言（案）（修正案 030117 版）－」（http://www.yodoriver.org/kaigi/teigen/teigen.html）2018 年 3 月 6 日
歴史民俗学研究会編（2004）『特集　かっぱ、カッパ、河童－愛される川の妖怪－』歴史民俗学研究 23（批評社）、314p
若尾五雄（1989）『河童の荒魂－河童は渦巻である－』堺屋図書、250p
若林一郎作／西山三郎絵（1986）『かっぱとひょうたん』ほるぷ出版、33p
和田寛（2010）『河童の文化誌　明治・大正・昭和編』岩田書院、437p
和田寛（2012）『河童の文化誌　平成編』岩田書院、537p

参考）

2017 年 11 月 25 日法政大学大学院地理学専攻　伊藤研究室

「田主丸町の河童を用いた地域振興」に関するアンケート調査

問1. 性別　①　男　　②　女

問2. 年齢　①　20 歳未満　　②　20 歳～39 歳　　③　40 歳～59 歳　　④　60 歳以上

問3. 職業 （できるだけ具体的に:　　）

問4. 田主丸町の在住歴

① 5 年未満 ②5 年～10 年未満 ③ 10 年～20 年未満 ④ 20 年～30 年未満
⑤ 30 年以上

問5. 田主丸町で行われている河童に関わるイベントについて教えてください。

（1） 河童に関わるイベントやお祭りの名前を教えてください。

例）町のお祭り・イベント、神社の祭礼、集落の行事など

ア）名前:　　イ）名前:　　ウ）名前:

（2） イベントやお祭りの内容について教えてください。

ア）（いつから、開催月日、イベントの特徴、参加者の特徴、賑わい方等）

イ）

ウ）

（3） あなたの事業所、またはあなたはこうしたイベント、お祭りに関わっていますか。
関わっている場合はその内容も教えてください。

ア）①積極的に関わっている ②普通に関わっている ③ほとんど関わっていない
④わからない

関わっている内容 ①寄付金を提供 ②商品・サービスを提供 ③イベントに参加
④その他（　　）

イ）①積極的に関わっている ②普通に関わっている ③ほとんど関わっていない
④わからない

関わっている内容 ①寄付金を提供 ②商品・サービスを提供 ③イベントに参加
④その他（　　）

ウ）①積極的に関わっている ②普通に関わっている ③ほとんど関わっていない
④わからない

関わっている内容 ①寄付金を提供 ②商品・サービスを提供 ③イベントに参加
④その他（　　）

問6. 田主丸町で行われている河童を使ったイベントについてのあなたの考えをお聞かせください。

（1） 田主丸町における河童を使ったイベントの地域振興効果は高いと思いますか。

① 高い ② どちらかと言えば高い ③ どちらとも言えない ④ どちらかと言えば低い
⑤ 低い ⑥ わからない ⑦ その他（　　）

（2） 河童を使ったイベントによる地域への影響についてあなたのお考えをお聞かせください。
回答は5段階でお答えください。

	はい	どちらとも言えない	いいえ
ア） 観光客が増えた	① ←――	②――③――	④――→ ⑤
イ） 町の名前が有名になった	① ←――	②――③――	④――→ ⑤
ウ） 田主丸の人々が元気になった	① ←――	②――③――	④――→ ⑤
エ） 経済的に潤った	① ←――	②――③――	④――→ ⑤
オ） 町の人々の交流が増えた	① ←――	②――③――	④――→ ⑤

（3） 田主丸町で河童を使ったイベントが行われていることに対して、あなたはどのように考えますか。

① 良いことである ② どちらかと言えば良いことである ③ どちらとも言えない
④ あまり良いとは言えない ⑤ 良くない ⑥ わからない ⑦ その他

（4）上の質問でそのように考える理由をお聞かせください。

（5） 日本では全国各地（例：遠野（トオノ）、色麻町（シカマ）、牛久（ウシク）、志木（シキ））で河童を用いた地域振興や地域おこしが行われています。田主丸町が参考にすべき地域の事例がありますか。

① ある（具体的な地域名と内容： ）
② ない ③ わからない ④ その他（ ）

（6） 全国各地の河童による地域振興に比べて、田主丸町のカッパによる地域振興の特徴は何でしょうか。

（7） 田主丸町の河童による地域振興における今後の課題は何だと思いますか。

7. 田主丸町と河童の関係に関連したその他の項目について教えてください。

（1）あなたは河童のぬいぐるみ「くるっぱ」を好きですか

① 好き ② どちらかと言えば好き ③ どちらとも言えない ④ どちらかと言えば嫌い
⑤ 嫌い ⑥ わからない ⑦ その他

（2）上の質問でそのように考える理由をお聞かせください。

（3）あなたの事業所は河童に関連した商品の製造・流通・販売を行っていますか。

① している　② していない　③ その他

（4）上の質問で①、③と答えた人に聞きます。その具体的内容を教えてください。

（5）あなたは田主丸町の河童伝説を知っていますか。

①よく知っている　②それなりに知っている　③あまり知らない　④まったく知らない
⑤その他

（6）上の質問で①、②、⑤と答えた人に聞きます。その具体的内容を教えてください。

（7）あなたは河童の存在を信じますか。

① 信じる　② 信じない　③どちらでもない　④ わからない
⑤ その他（　　）

（8）田主丸町の河童は水辺を守っていますか。

① 守っている　② どちらかと言えば守っている　③ どちらでもない
④ あまり守っていない　⑤守っていない　⑥ わからない
⑦ 河童を信じていないので、何とも言えない　⑧ その他（　　）

（9）あなたは河童のいる水辺を守りたいと思いますか。

① 守りたい　② どちらかと言えば守りたい　③ どちらでもない
④ あまり守りたいとは思わない　⑤ 守りたいとは思わない　⑥わからない
⑦ 河童を信じていないので、何とも言えない　⑧ その他（　　）

（10）あなたは田主丸町の河童による地域振興、地域おこしによって、田主丸町の水辺がきれいになった、またはきれいになったと思いますか。

① きれいになった　② 少しきれいになった　③ どちらとも言えない
④ あまりきれいになっていない　⑤ きれいになっていない　⑥よくわからない
⑦ その他（　　）

質問は以上です。ご協力ありがとうございました。